
最後の人造人間

灰色鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の人造人間

【NZコード】

N3544Y

【作者名】

灰色鼠

【あらすじ】

フラスコの中の人造人間騒動後のお話

プロローグ（前書き）

初投稿です。

拙い文章ですが、それでもいいよー、という心優しい方は下にスクロール！

プロローグ

（プロローグ）

禍々しい光が月明かりが差す倉庫でほどばしる。

人体鍊成。

それは死んだ人間を再びこの世に甦らそうとする鍊金術の最大の禁忌。

人間という生き物はやるなと言われるとやりたくなるものである。

だが、この人体鍊成を行った術者は人を甦らそうという意図ではなかつた。

部屋一帯に書かれた術式の上に小さな影が重苦しく落ちた。

「痛つ……たいなア。ど畜生が……」

比較的子供らしい高い声が倉庫に響き渡り、むくりと起き上がった。

肩から夥しい程の鮮血が冷たい床に爛れ落ちていく。

「あの野郎オ、色々持つて行きやがつて……」

突如、青い閃光が空を走った。

「さあ……と、ここからどうすつかな……」

首を傾げた小さな影は、二つの紅い光を放っていた。

プロローグ（後書き）

出だしから中一病爆発ですね。

こんな感じで続けていきますので、よろしくお願いします！

キャラ紹介（前書き）

オリキャラと登場人物についての紹介です

キャラ紹介

- ・主人公・・
- ・限りなくオリキャラです
- ・名前は後々出でます
- ・赤髪紅目
- ・見た目は1-2歳くらい
- ・腰に刀、着流し、常に裸足
- ・真理に記憶と両腕を持って行かれました
- ・何故かはまだ秘密
- ・イーストシティに出没します
- ・ロイ・マスタング・・
- ・イーストシティの東部司令部で准将やつてます

……リザ・ホークアイ……

・上の准将さんの補佐をしてます

……その他諸々……

多分後々出すつもりです

ざつとこんなかんじでほのぼの（？）と続けていきます！

プロローグの前書きにも書いた通り、初めての連載で右も左もわからぬ状態でやっていきますので、拙い文章を読んで頂ける心優しい方、想像豊かな作家様の作品を横目に『最後の人造人間』を暖かく見守つていって下さいませ。

キャラ紹介（後書き）

ここにコメント何を書こうつか戸惑います。
基本書きたいことが無いもんでしょ。

次から物語が始まります！

第一話 始まつは朝（前書き）

第一話です！

短めかもしぬませんが、楽しんで読んでいただいたらありがたいです。

第一話 始まりは朝

ある寒い日の朝。

青色の軍服を着た女性がある家の扉を叩く。

「お迎えに上がりました、マスタング准将。」

しばらくしてどこか気急く扉が開き、寝癖のついた髪をぱりぱりと搔きむしりながら男の顔がひょっこりと覗いた。

ロイ・マスタング。

先日の軍部の内乱以降、大佐から准将に昇級した男である。

「准将、早く支度なさつてください。今日も忙しいのですから。」

リザ・ホークアイ。

ロイ・マスタング准将の補佐であり、お目付け役。准将と同じく、軍部の内乱以降、中尉から大尉に昇級した女性である。

「大尉か。すまない、寝過ぎした。すぐに支度するから待っていてくれ」

リザは軽く敬礼し、手を後ろに組んだ

「最近ちやんと寝眠とられてないのです?」

「全く、君には敵わないな。」

ロイは髪を搔き上げ、浅いため息をついた

「付き合いで長いので。司令部ではサボつてばかりなのがいい血毛では随分と熱心に仕事をなさっているのですね。」

「ほんと、君には敵わない……」

的を射た言葉にロイはがつくんと頸垂れるしかなかった。

「ま、いざれはしなければいけないことだ。イシュヴァール人の為にも、殲滅戦で傷付いた人々の為にも。」

先程、軍内の内乱と言つたがそれは表向きの話で、実際は中央に賢者の石を持つホムンクルスという人造人間、その人造人間に唆された中央軍と鋼の鍊金術師、エドワード・エルリック等の国家鍊金術師や北のブリッグス軍、ロイの部下達の戦いであった。

その戦いは革命軍の辛勝に終わった。ロイはその際に元国家鍊金術師のドクター・マルコーにイシュヴァール人らを助けると約束したのだ。

「そうですね。でもまだ先は長いのですから無理はなさらないでくださいね。」

「今日は随分と優しいんだな」

「無理をして体壊した挙げ句、休暇を取られても困りますので。」

「どうやら私の気のせいだつたようだ。」

ロイは拗ねた小さい子供の様に口を尖らせた。

二人は東部司令部に着き、指令室の扉を開けた。二人が一番乗りだったようで部屋には誰もいなかつた。

「全く、何をやつてゐんだあいつらは。給料減らしてやがつか。」

深いため息をつき、いつも通り椅子に腰を掛けようとした時だつた。ロイの顔色が変わつた。

「准将、どうかなされたのですか？」

リザがロイに駆け寄り、田線の先の、机の下にあるものを捉えた。

「これは……！」

そこには、全身に血を付けた小さな少年が体を縮こませて横たわっていた。

第一話 始まりは朝（後書き）

つーべ。

前書きも後書きも何を書けばよこのやう……

次話はちよつと話は進むかもです。

第一話 謎の少年（前書き）

第一話目で不定期投稿だな、と自分で感じる」の頃です。

「文章下手じゃね？」

と思つ方！

思うだけにしてください。
私にもわかっていますので。

第一話 謎の少年

ローマと紅い髪の少年とただならぬ雰囲気で向かって立っている。

「……何とか言つたりどつだね？」

「……」

（数分前）

「「れは……！」

「……子供……だよな」

「……子供……ですね、かなり訛ありの」

少年はアメストリス国内では見慣れない黒の服装をしており、裸足で横たわっていた。

さらに一人を驚かしたことは、今は出血はしていないものの、上半身がべつたりと血で赤く染め上げられて、少年の傍らには見た目に似合わない長い刀が置かれていた。

何故このような少年がここにいるのか、何かに追われここに逃げ込んだのか、考える前に一人の体はすでに動いていた。

「大尉、この子をソファーに寝かせておいてくれ」

「了解しました」

リザはロイの机の下から少年を起こさないよう、そつと抱き上げると、ソファーに寝かせた。リザはその時、少年に対しても違和感を覚えた

「これは預かっておいた方が良さそうだな」

ロイは少年の側に置いてあつた刀を持ち上げた。

「見慣れない服装だな。シンの子かもしけんな

「だとしてもアメストリスに来る理由がありませんが

セツルヒヒコのロロイの部下が出勤していく

「おはよひゞやこます……って誰ですか。これ

ロイ達の次にやって来たのはホットドックをくわえ、軍服だらしなく着ている男、ハイマンス・ブレダ。この男も人造人間との闘いで陰ながら活躍したのだ。

「知らん。私が知りたいくらいだ

「あやか准将の子じやないですよね」

ブレダが准将に疑いの目を向ける。

「な……！そんな事があるわけないだろ？……多分、」

「可能性はあるんですね」

「やかましい！」

そんな喧嘩の中、起きたのが起こされたのか、少年がむくつと起き上がった。

「あ、起きた」

「ようやく起きたな。私の質問に答えてもらひ

少年はロイを一瞥すると話も聞かず再度ソファーに寝転び、寝はじめた。

「寝るなーー！」

ロイは質問を無視された事に腹を立てた。少年は眉間にしわを寄せ、不機嫌そうに起き上がった。

すかさずリザが少年の前にお茶を出す。

「『めんなさいね。いるたくて。良かったら飲んでね』

少年は皿を丸くしてリザを見ると唇を横に引き結び、首を横に振った。

「セツ。じゅあ、ここ置いておくわ」

リザはお茶をいれたカップをテーブルに置いた。

「すまない。私は子供の扱いは慣れていないのでね」

ロイはしつけた場面でもリザがいて良かつたとしつづく。

「私は元國家鍊金術師、國軍准將のロイ・マスタングだ。君の名前も教えてくれないかね？」

「……」

少年は品評するかのようにロイの全身を見る。その少年の紅い瞳は、ひどくすんでいて、まるで魚の死んだ眼のようだ。

黙つたままの少年が僅かに身じろぎすると、着流しの袖がするつと肩から滑り落ちた。

「な……！」

ロイは絶句した。なぜなら、少年の肩からあるはずのものが無かつたのだ。切り傷もなければ、事故に遭つた形跡もない。

「お前……、腕が……」

「……」

先程大尉が感じた違和感とはこれだった。お茶を受け取らなかつたのもそのせ이다。一方少年はそれを忌ま忌ましげに見る様なことはなかつた。

少年は両腕失つたらしく、垂れ下がつた袖をなおせなかつた。リザが気遣い、それをなおす。

「何があった」

「……」

「……何か言ひたらどうだね？」

少年は一瞬何か考える様に空を見上げると、そのままテーブルの脚を軽く蹴った。その動作は不規則に行われ、けれどもリズム良く音が鳴らされた。

「ん、と脚を蹴り終えた後に少年はふっと浅く息を吐き、立ち上がる。それと同時に口元も立ち上がった。

「行こう、大尉」

「は？ 何を言つてこらのですかー？」

「命令だ。黙つてついて來い。ブレダ、留守を頼む」

少年はローハーのその言葉を聞くと、密かに口角を上げた。

「まあ、大尉がいるからいいっすけど、早く帰ってきてくださいね」

ロイはブレダとすれ違ひそのままにひらりと手を振った。

准将と大尉は少年に連れられるまま、街の人気の無い廃工場へ来て
いた。

「准将」

リザはロイに耳打ちする。

「どうこういひとですか？」

「さつきあの子は脚を蹴つていただろう？あれはモールス信号なのだよ。『オレに興味が湧いたなら、ついて来い。鍊金術師なら尚更な』とな

「新手のテロでは？」

「可能性はあるかもしかんな。信号を出した理由がわからん」

少年が足を止めた。目的地に着いた様だ。少年が身を翻す。

「始めてまして。オレはノワール・ホックス。不法侵入で殺さずにいさせてくれて礼を言うぜ」

これが少年の発した最初の言葉だった。ノワール・ホックスと名乗る少年は深々と頭を下げた。

「軍部と知つて入つて来たのかね？」

「まさか。寒いし、腹減つてたし、眠たかったから、適当に入っただけだ」

ノワールは肩をすくめ、鼻を鳴らした。

「警備の者がいたのにか？」

「警備？ ははつー。そんな堂々と入るかよ」

「まづ。どうやって入ったのかわからんが、まずは君の出所を知る方が先だな」

ロイの皿つきががらりと変わった途端、ノワールの表情が曇った。

「……わかんねエんだよなア。これだけはどり出せうとして、記憶が途切れちまう」

ノワールの紅い瞳が濶んでいく。瞳の中に深い闇が広がっていくよ

う。

「だけど、一つだけわかることがあるんだよなア。それが此処にあるわけだ」

ノワールが倉庫を横目で見る。一人の予想が徐々に悪い方へ向かう。

第一話 謎の少年（後書き）

主人公の

ノワール・ホックスは

ノワール…フランス語で黒。

ホックス…めっちゃ簡単に作りました。

第三話 ノワール（前書き）

今話は色々設定込み入っています。

ちょっと長いかもしません……

第三話 ノワール

「大尉、見張りを頼む」

「了解」

ロイはリザとの短いやり取りを終えると、古い金属扉を開けた。埃っぽい空気と共に、血生臭い湿った臭いが鼻の奥についた。

「人体鍊成の陣か……！」

二人の悪い予想通りの光景が広がっていた。倉庫の中心には何者の血溜まりが出来ていた。

「あまり驚いてねエな。もしかして、あんたも経験あるのかな？」

ノワールはその陣の中心に立ち、冷酷な笑みを浮かべてロイの顔を覗き込む。

「……。お前は何を鍛成した?」

「オレはオレを鍛成した。何の為かは忘れちまた。なんせ代価にしたのは御察しの通りこの両腕と」

ノワールは自らの頭を見る様に上部を見た。

「『大部分の記憶』なわけで」

「……ノワール。自分自身を鍛成するには、入口と出口が必要だろう? どうやって戻つてこれた?」

「大方、出口を鍛成したんじゃね? の?」

ロイは曖昧なノワールの発言に呆れ、ため息をついた。

「何を覚えている?」

「自分自身の事が少々、鍊金術、真理、…くらいかな?」

「ほう、親や住所は?」

「さあ? 親はいたような、いなかつたような…。住所はないからいないんじゃね?」

ロイは一層険しい顔になる。

「軍部で信号を使った理由は?お前は何者だ?」

「……言えねエな」

「何故だ」

「見ず知らずの奴に情報をほいほい教える程オレは馬鹿じやねエし、お人好しじやねエ。」

それに不公平だろが。あんたは聞き、オレが答える。オレにメリットが皆無じやねエか」

ノワールは少し不機嫌になり反論する。確かに誰でもこのような尋問紛いを受けると、不機嫌になるものだ。

不意に扉の外で銃の安全装置を外す音がノワールとロイの耳に入る。

「どうした」

「いえ、何か気配を感じたので」

リザの言つ通りで辺りは人一人いないのだが、どこか殺氣じみたものが充満している。

「中々勘が良いな。そうぞ、この辺りは今の世の中のやり方が気に食わないテロリストの巣窟だぜ。奴サンは『丁寧に狙撃する気マンマンらしい』

そういうノワールの目線の先には割れた窓ガラスの向こうから銃を向け、こちらの様子を伺っている。

「だが、我々を殺すには力不足だな。こちらには『鷹の眼』と呼ばれた大尉がいるからな」

「へえ、あんたが『鷹の眼』」

ノワールは一人に聞き取れない音量で呟いた。

「……で？ あんたは何の錬金術使つんだ？」

ロイは右手をポケットから手を出す。すでにその手には錬成陣が書かれた手袋を装着している。そこに這っている火蜥蜴が生き生きと躍動感を醸し出している。

「久々にこの焰が使えそうだ」

「いい歳してはしゃぎ過ぎないでくださいね」

「わかつてゐよ。大尉、援護を頼む」

「言われなくとも」

ロイヒリザはノワールをよそにテロリスト鎮圧に走った。

「あーあ、置いてきぼりですか？」

二人の背中を見送ったノワールだが、多数の背後の気配に振り向いた。

「まあ、こっちも好きに暴れるとしますかね」

「よつ、と」

ノワールは腕のないハンデを背負つてゐにも係わらず、大勢の大人達を伸していった。

「オラオラア！手応えのある奴ア いねエカア！？」

「なんだ！？このガキ！化け物か！？」

ノワールの動きは見事なもので、男の首に脚でクリンチし、そのまま身体を捻つて頸骨を折つたり、巧みに足払いや脚のみで投げ技を掛けたりするなど、戦術に長けていた。

「何押されてやがる！相手は子供だ！」

テロリストが次々に銃を構え、ノワールに発砲する。ノワールは銃弾を避けるも、頭部に一発銃弾が貫いた。

ノワールの身体がぐらりと傾き、倒れるかとその場の皆がそう思った。が、ノワールの身体は脚で踏ん張り、倒れなかつた。

「…………いつてエな。一回死んじまつたじやねエか。」

ノワールの傷口から赤い閃光が迸つたかと思つと、すぐさま傷は塞がつた。だが、それだけでは留まらず、ノワールの姿が変化していく。

「てめHうの冥土の土産にオレの本体見せてやる」

テロリストの前に現れたモノは、尖つた耳に、頬まで裂けた口、吊り上がつた目、風になびく金色の毛、極めつけは尻から生える九本の尻尾。

「化け物め…………！」

熱を纏つた巨大な狐だった。

第三話 ノワール（後書き）

あれ？

エンヴィーのパクリじゃね？

と思ったあなた！

後々少しだけ違つたりするかもしませんね。

第四話 焼け焦げた地面（前書き）

突然ですが、最近、小説執筆しているおかげなのか作文を書くのが早くなりました。

私が、感想文書くのが苦手なんですが……。

第四話 焼け焦げた地面

「あらかた片付いたな

「そうですね

ロイは戦闘で乱れた襟を正す。

「他愛のない。運動不足の私にはもう少し粘つて欲しかったのだが
な

ロイ達はテロリストを氣絶まで止め、捕縛は応援の憲兵に任せた。

「准将、あの男の子は……？」

「しまった……置いてきた……！

「全くもうーだから無能なんですよー。」

一人は慌てて倉庫付近へ走った。テロリスト鎮圧という戦火の中、まだ幼い少年が無事いる訳がないのだ。

「無能は雨の日だけで充分なんですからー。」

「上司を無能無能つて君ね……」

「戦闘の中で子供一人置いていく人に無能以外に何か当てはまりますかー!?」

「……ハイ。スママセソ……」

ノワールのもといた倉庫へ戻ってきたが倉庫の中にはノワールはおらなかつた。

「手遅れですか……」

「いや、あれは何だ？」

ロイが田にしたのは、道の角からするつと伸びる、一本の尻尾の様な物であった。

リザは銃を構え、ロイは発火布をはめ直し、そこへ足を忍ばせる。二人で息を合わせ飛び出すと、何事もなかつた様な顔で佇み、こちらへ振り返つていた。

「あ、れ？」

「終わった？」

ノワールの前には氣味が悪くなる程に何もなかつた。だが、壁は燃やした様に焦げ付き、地面には巨大な生き物の足跡が残つている。

「え？ あ、ああ。お前は何ともないのか？」

「おかげさまで。で？禁忌を犯したオレを憲兵に突き出さのか？」

ロイはしばらく考え込む。

「いや、私がしばらく預かる。こんな多芸多才な奴をおめおめと憲兵に明け渡すのは味気無いのでね」

「知らねヒよ？オレがこんな奴だつても」

ノワールは両手の人差し指を立て、頭に乗せる。

「私を舐めてもらつては困る。私も様々な奴と戦つてきたのだよ」

「ああ。じゃ、よろしく頼まア」

ノワールの飄々とした態度に拍子抜けする一回だった。

「……意外とあつさりなんだな。プライドとかないのかね？」

「住むとこもねHし、その上、牢獄行きじゃなけりや食い足くしかないだる。それが釣り糸に垂らされた餌だとわかつていても

「よかぬH、ついて来い。ノワール」

「へーへー」

そう口イの後ろでけだるげに返事するノワールの冷たい笑みに気付くものは誰もいない。

第四話 焼け焦げた地面（後書き）

短かったです。

すみません……^_^(—)^_

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3544y/>

最後の人造人間

2011年11月24日22時46分発行